

明日香村発掘調査報告会

平成 14 年 11 月 24 日
明日香村教育委員会



開 会 2:00～

調査報告 2:05～

報告1 「酒船石遺跡(第 17・20 次)の調査」 清岡廣子

報告2 「酒船石遺跡(第 18・19 次)の調査」 西光慎治

報告3 「小治田宮の井戸枠の年輪年代」 相原嘉之

休 憩 3:20～3:30

記念講演 3:30～

「東アジアにおける十二支像の起源と変遷」

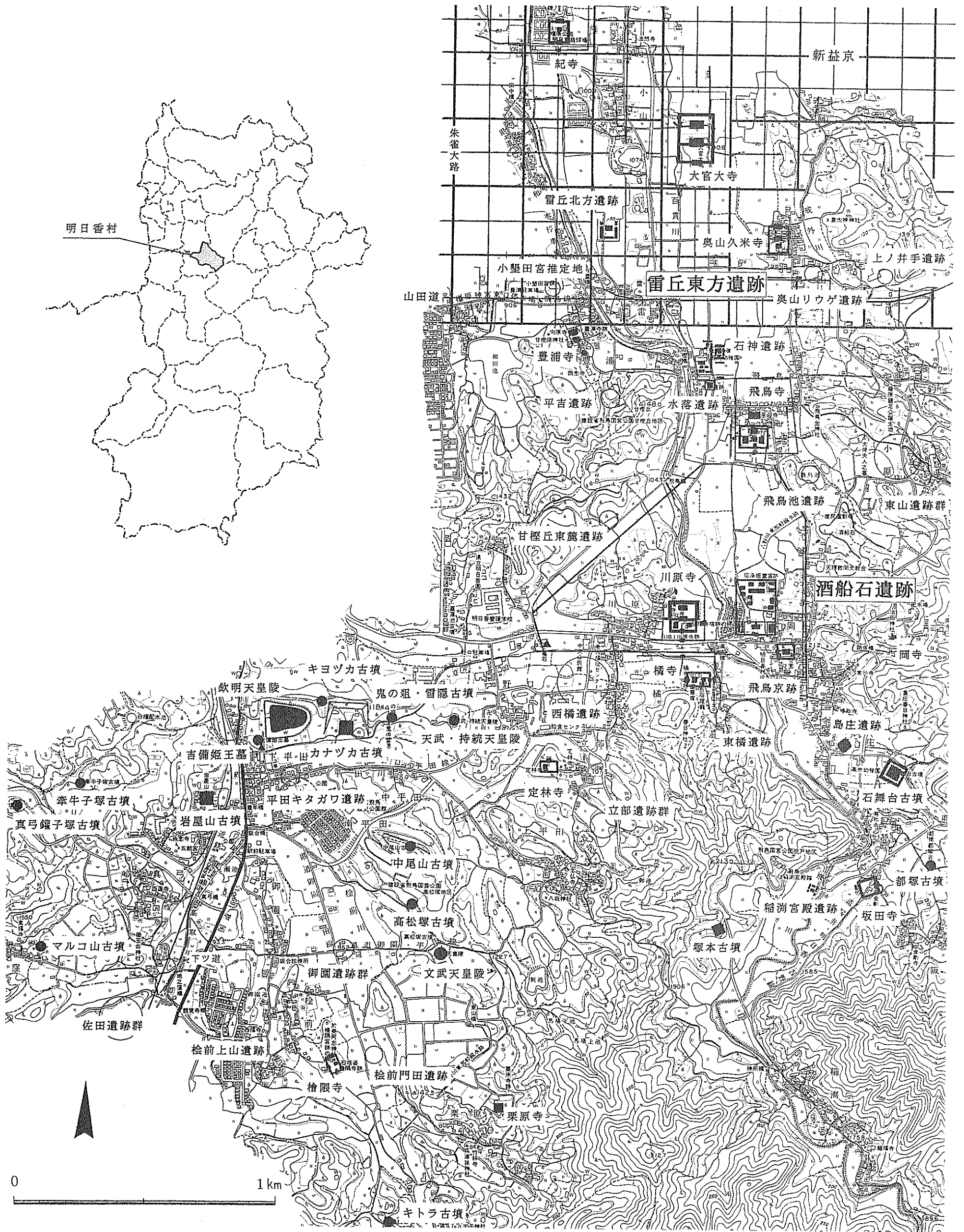
講師 明日香村文化財顧問

関西大学名誉教授

網干善教氏

閉 会





明日香村内主要遺跡地図

酒船石遺跡（第17次）調査概要

明日香村教育委員会

調査地	明日香村大字岡小字酒舟 423-1 番地
調査原因	範囲確認調査
調査面積	161㎡（17A区：120㎡、17B区 41.5㎡）
調査期間	2002年1月23日～3月29日

はじめに

今回の調査は、酒船石の北約50mの丘陵上で、調査区を2ヶ所設定した。調査成果は以下の通りである。

17A調査区

検出遺構

土坑1基と、畑作に伴う小溝群を検出した。造成土の堆積は確認できなかった。

出土遺物

土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、砂岩がある。土坑からは瓦器が多く出土した。

17B調査区

検出遺構

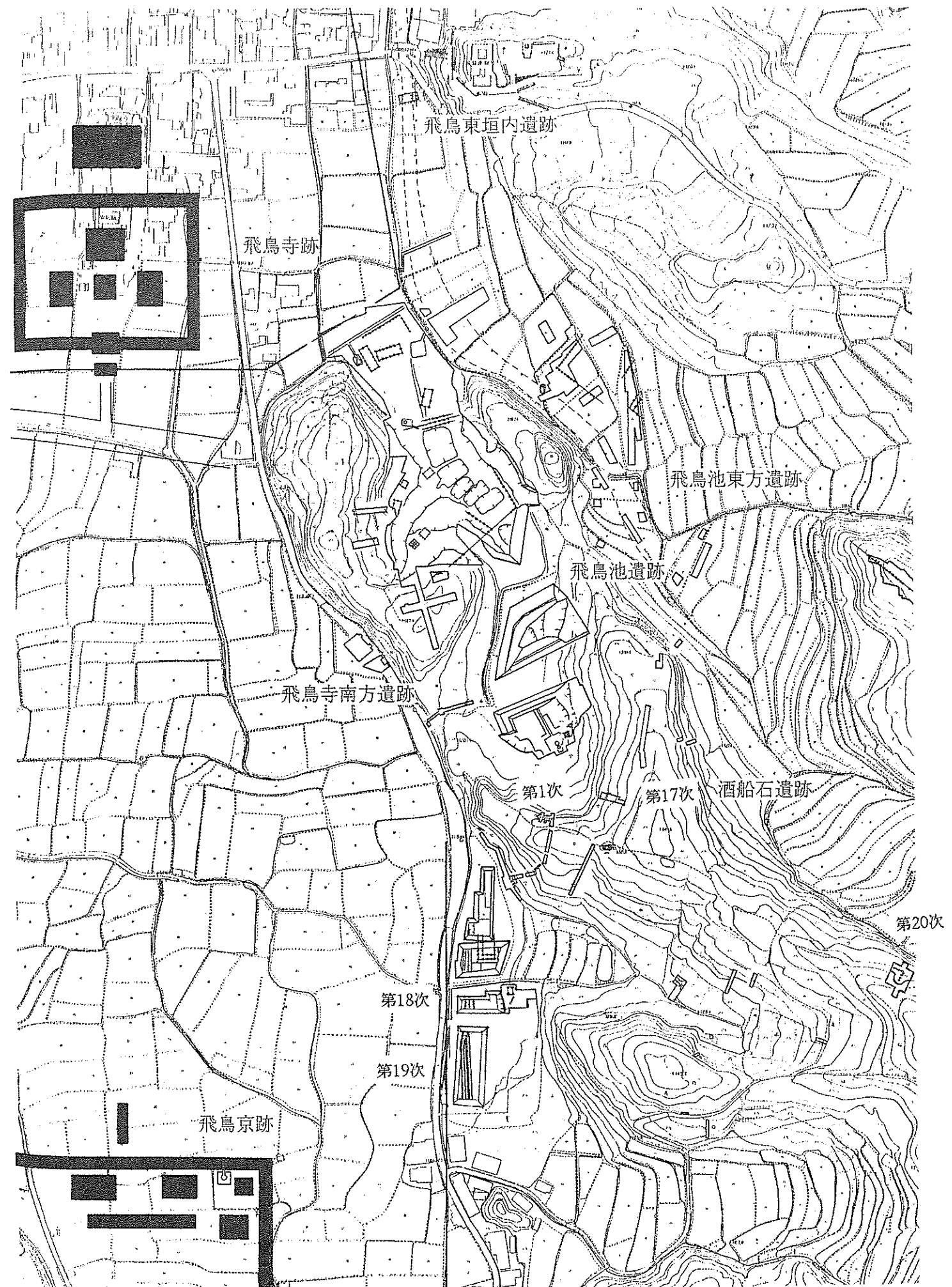
石垣遺構のコーナー部分を検出した。L字状に置かれた石垣基礎石とそれに伴う造成土を確認している。造成は、地山を削り出し版築を行っている。基礎石の4m後方から版築されており、高さ2.5mに及ぶ。砂岩切石積みの際には版築状の盛土を行い、裏込土としている。裏込土には砂岩屑層が含まれており、砂岩積みの石垣が高さ1m程は想定できる。基礎石の前面にも版築が1m程行われ、基礎石の高さでテラス面を作りだしている。基礎石は、調査区内で東西方向5石、南北方向3石検出でき、さらに東西に伸びる。東西方向の基礎石の規模は幅50～70cm、奥行50～110cm、厚み20～60cmである。すべて上面を平滑に加工しており、標高131.5mである。南北方向の基礎石は大部分が調査区外であるが、同様の規模をもつと思われる。石材はすべて「飛鳥石」、黒雲母石英閃緑岩である。

出土遺物

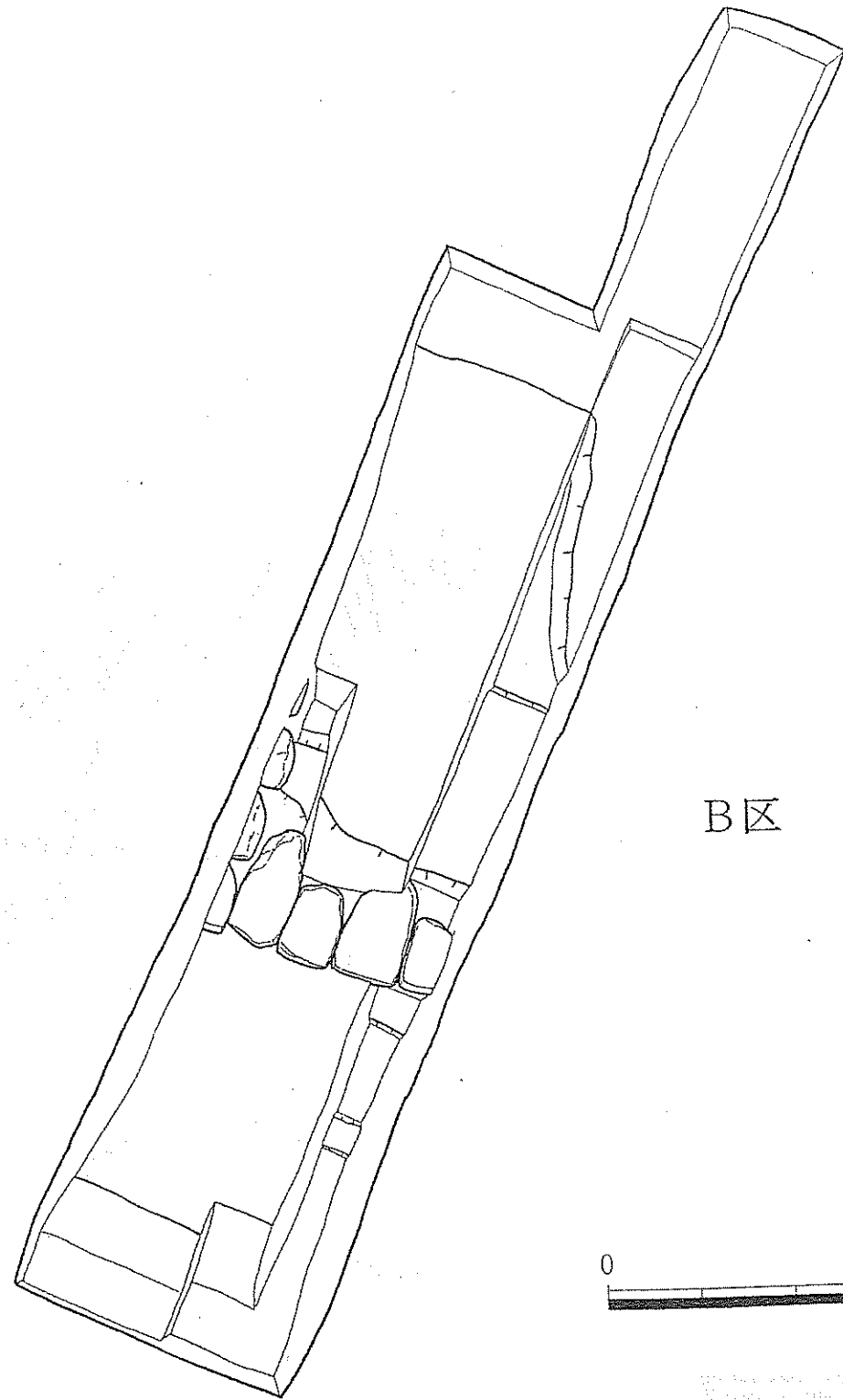
土師器、須恵器、瓦器、瓦、砂岩がある。造成土には時期決定できる遺物は認められなかった。

まとめ

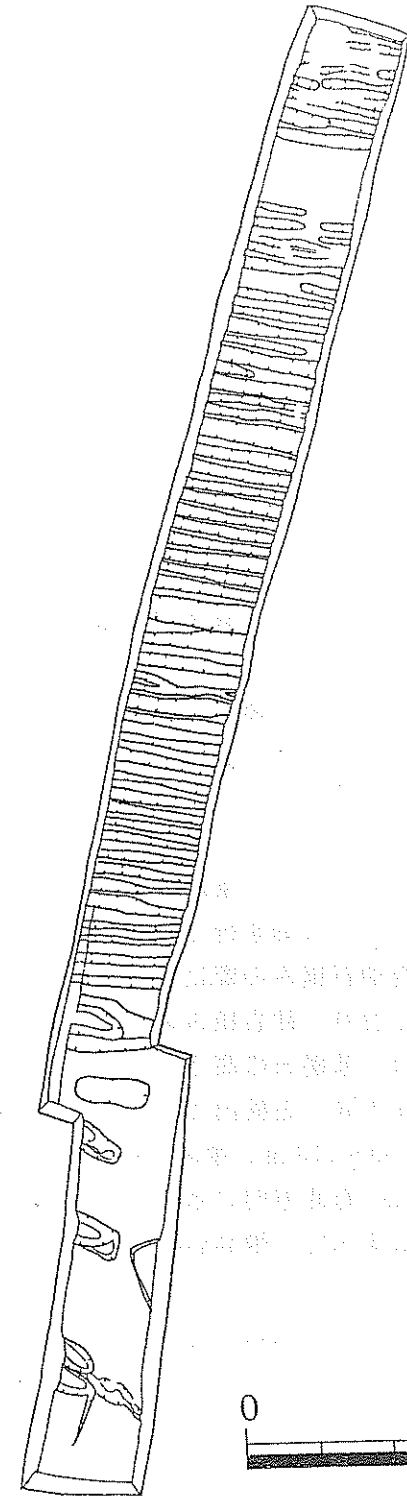
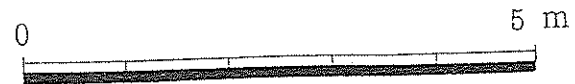
今回の調査では、東側と西側にある丘陵先端部には砂岩石垣が巡ることが確実となった。石垣遺構のコーナー部分を検出したことから、この地でクランクしてさらに丘陵先端に向うものと思われる。



酒船石遺跡周辺遺跡図 (1:3000)



B区



A区



はじ
今
北斜
20
調
おり
21m
検出
今
土、
石
込ま
込ん
てい
なる
は本
これ
石を
てい
る。
てい
くつ
屑層
砂岩
基礎
礎とし
奥行4
上面は
~80cm

酒船石遺跡第 17 次調査遺構図

酒船石遺跡（第20次）調査概要

明日香村教育委員会

調査地 明日香村大字岡小字コンニャク塚 662 番地
調査原因 範囲確認調査
調査面積 171㎡（A区：133㎡、B区：38㎡）
調査期間 2002年7月2日～継続中

はじめに

今回の調査は、酒船石から東南へ約150mの位置で、遺跡の東限を確定するために丘陵北斜面で2ヶ所の調査区を設けた。各調査区の成果は以下の通りである。

20A調査区

調査地の現地形をみると、上部は急峻な斜面地で、下部はやや緩やかな平坦面となっており、最上部の標高は148.8m、最下部は139.5mで、約9mの比高差がある。当初2.5×21mで設定したが、拡張を東西に行ったため、調査面積は133㎡である。

検出遺構

今回の調査では石垣遺構のコーナー部分を検出した。石垣基礎石およびそれに伴う造成土、崩落した砂岩切石を確認した。

石垣は、地山をコ字状に掘り込んで基礎石を設置している。西側と東側では地山の削り込まれかた、造成土に違いがあり、西側ではL字状の基礎石の配置にあわせて地山を削り込んでいる。基礎石から背面の地山面までの約1m間に版築状に盛られた造成土を確認している。この土は以前より砂岩石垣の裏込土と解されていた砂岩屑層と粘土、砂の互層となる造成土である。第1・17次調査では版築を行った後に裏込めを行っているが、ここでは本来の地形を利用していることが窺える。裏込土の砂岩屑層の単位は10cm前後であり、これと砂岩切石の厚みがよく符号する。石段の段差が20～30cmであることから、砂岩切石を2段もしくは3段設置することは可能であり、調査地でも基礎石に砂岩切石が積まれていたと考えられる。裏込土からは最低でも1mの高さまでは砂岩が積まれたことが窺える。東側は地山が緩やかに傾斜している。版築土は確認できず、地山の上には盛土を行っている。L字状の基礎石の外側には造成面として砂岩屑層が面的に敷かれ、テラス面をつくっている。第17次調査でも基礎石の前面に砂岩屑層土面があることを勘案すると、砂岩屑層は化粧土としての使用が示唆される。この砂岩屑層は基礎石前面を一部覆っており、砂岩積みの際に化粧を施したものである。

基礎石は、L字状に並べられており、東西は平坦に、斜面では段状に石を置いて石垣基礎としている。東西方向には10石並んでおり、さらに西へ伸びる。規模は東西幅30～50cm、奥行40～50cm、厚み20～30cmである。標高は139.3m前後で、西側に向って低い。石の上面はすべて平滑に加工されている。第1・17次調査で検出された基礎石の規模（幅60～80cm、奥行50～100cm前後）と比べると小さいものである。南北方向には10石並んで

おり、北側の3石が平坦に、南側では石段状になっており、現状で7段確認できた。規模は東西幅50～80cm、奥行40～60cmである。段状に並ぶのは基本的に1石のみであるが、上部3段の幅が80cm前後と広く、2段目は2石設置している。最上段の標高は141.4mで、下まで約2mの比高差がある。石段の各段差は上から4石が30cm前後、下の3石が20cm前後で、段差の角度は30度前後である。これらの基礎石は地山を削り込んで掘形としている。

砂岩は、調査地で検出したものの多くが流入土に包まれており、崩落した状況が窺えた。石垣基礎石の東側に隣接して砂岩切石を集中的に検出した。規模は20×20～30cm、厚み10cm前後のものが多い。ただ、第1次調査の砂岩の規模が30×20×20cmであり、基礎石と合わせて調査地では石垣の規模が縮小傾向にあることが窺える。検出した砂岩には碎片もある。多くは斜めにカットしており、本来石垣として積まれていたことが推察される。

出土遺物

土師器、須恵器、瓦器、陶器、石器、砂岩がある。土器類の出土量は少なく、細片である。石垣遺構の時期決定できるものはない。

20B調査区

20A調査区の約50m東側で設けた調査区で、調査面積は38㎡である。現地形はややなだらかな斜面である。ほぼ表土直下で地山である花崗岩岩盤となり、造成土は確認できなかった。

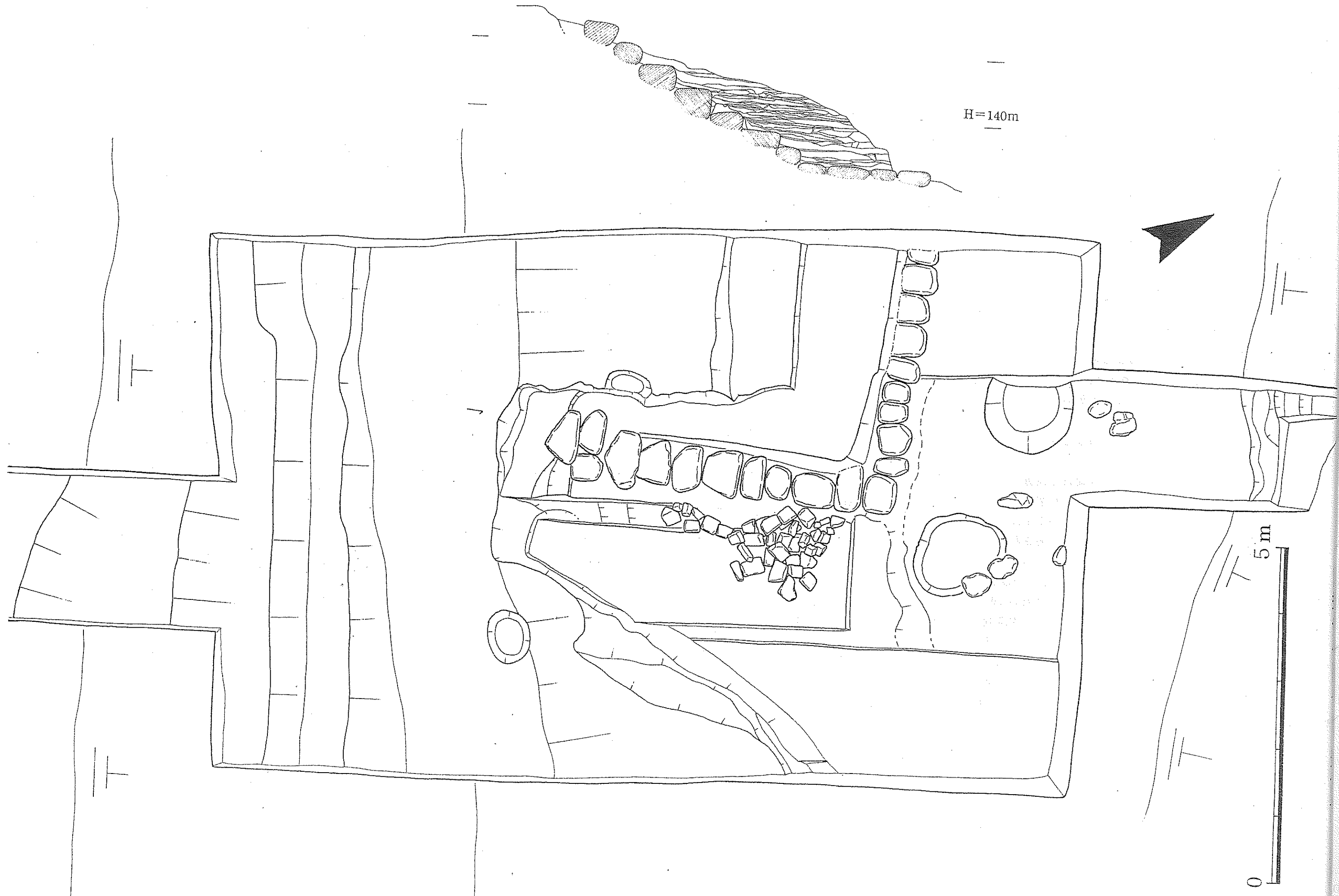
まとめ

今回の調査では、酒船石遺跡の範囲および構造等の解明に向けて大きな成果を得ることができた。以下、今回の調査成果を挙げる。

今回検出した石垣遺構は、第1次調査の砂岩石垣と同一の石垣と考えられる。丘陵北側において外周約300mは推定でき、これまでの想定通り石垣が丘陵全域に及ぶことが判明した。調査地で砂岩石垣は東端を示す可能性がある。

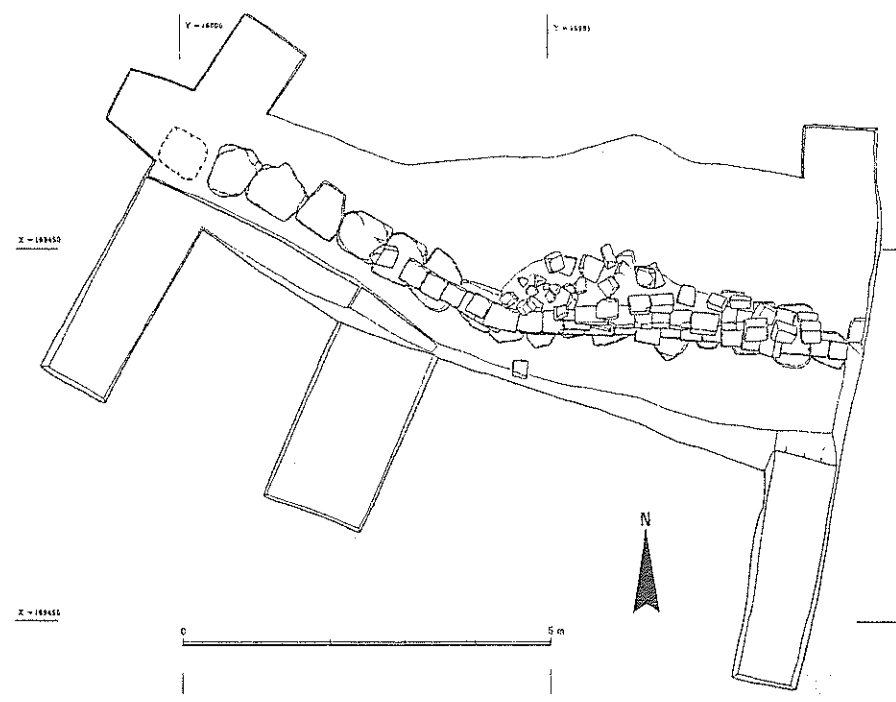
今回、石段状の石垣基礎石を検出したことで、石垣の構造についての新知見が得られた。石垣基礎石のL字状の配置は第17次で確認していたが、平坦に並べられたものであった。石段状に設置された基礎石は石垣の斜面処理のための築造工法と思われる。

ここでは版築での盛土は確認できず、地山を削り出して基礎石を並べ、砂岩切石を積み重ねて、裏込土のみの造成を行っている。地山元来の地形をそのまま利用していることが判断でき、丘陵の造成は地形に即して行っていることが窺える。

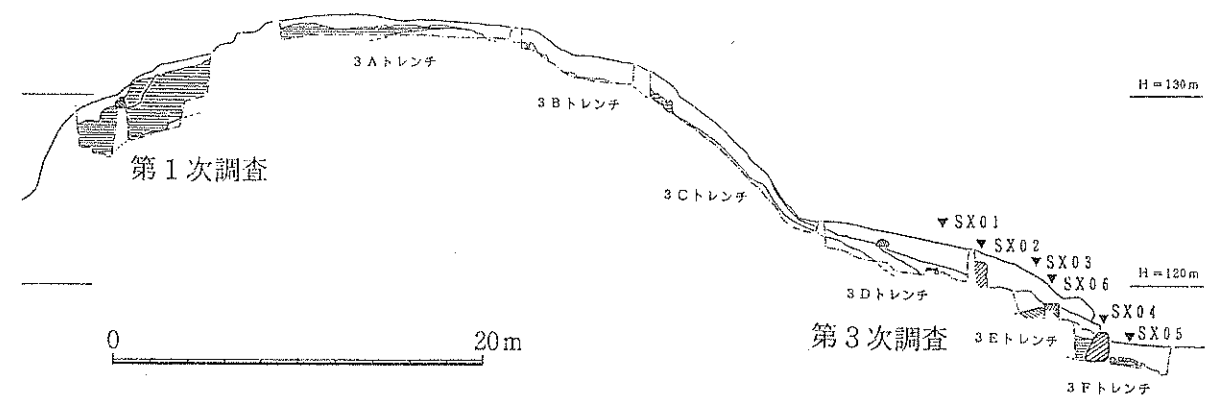


H=140m

0 5 m



1 : 100



酒船石遺跡断面模式図 (1 : 400)

「両槻宮」「宮の東山」関係史料

斉明2年(656)是歳〔日本書紀〕

(前略)田身嶺に、冠らしむるに周れる垣を以てす。田身は山の名なり。此をば大務と云ふ。復、嶺の上の両つの槻の樹の邊に、觀を起つ。號けて兩槻宮とす。亦是は天宮と曰ふ。時に興事を好む。廻ち水工をして渠穿らしむ。香山の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。時の人謗りて曰はく、「狂心の渠。功夫を損し費すこと、三萬余。垣造る功夫を費し損すこと、七萬余。宮材爛れ、山椒埋れたり」といふ。又、謗りて曰く、「石の山丘を作る。作る隨に自づからに破れなむ」といふ。若しは未だ成らざる時に據りて、此の謗を作せるか。

斉明4年(658)11月壬午(3日)〔日本書紀〕

留守官蘇我赤兄臣、有馬皇子に語りて曰はく、「天皇の治らす政事、三つの失有り。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚むること、一つ。長く渠水を穿りて、公糧を損し費すこと、二つ。舟に石を載みて、運び積みて丘にすること、三つ。」といふ。

天武4年(675)11月癸卯(3日)〔日本書紀〕

人有りて宮の東の岳に登りて、妖言して自ら刎ねて死ぬ。

持統7年(693)9月辛卯(5日)〔日本書紀〕

多武嶺に幸す。

持統10年(696)3月乙巳(3日)〔日本書紀〕

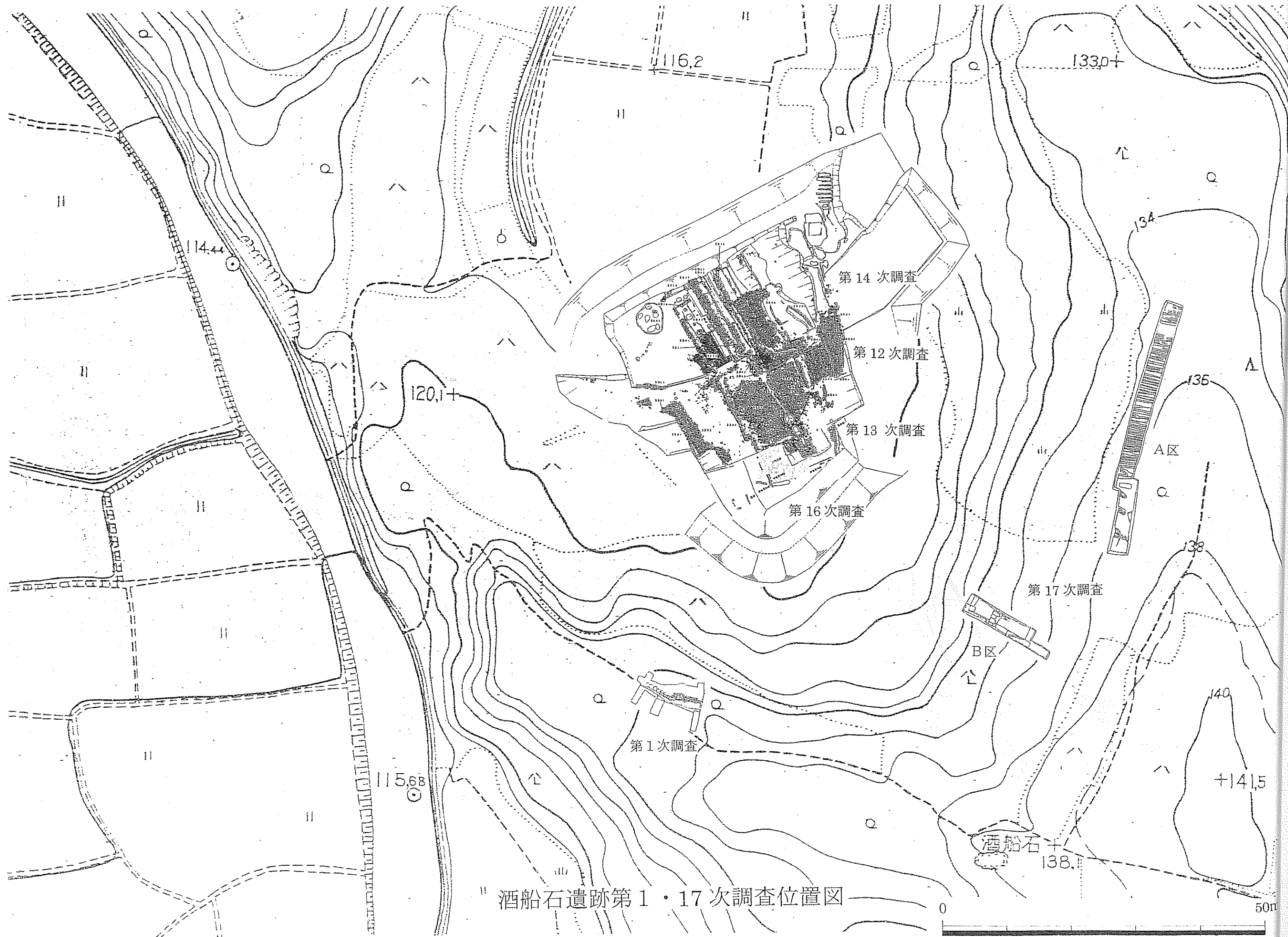
二槻宮に幸す。

大宝2年(702)3月甲申(17日)〔続日本紀〕文武天皇

大倭国をして二槻離宮を繕治はしむ。



酒船石遺跡第1次調査



酒船石遺跡第1・17次調査位置図

検
南
い
り
深
部
側
い
柱
堀
柱
出
ま
長
と

酒船石遺跡(第18次)調査概要

明日香村教育委員会

調査地 奈良県高市郡明日香村大字岡小字八条395番地
調査原因 信者会館改築に伴う事前調査
調査面積 約800㎡
調査期間 2002年2月4日～3月31日

検出遺構

検出した主な遺構には、石組溝、石組小溝、素掘溝、掘立柱建物、掘立柱塀などがある。南北石組溝は改修されながらも数時期の変遷がみられる。以下、遺構の概要についてみていく。

石組溝①は、7世紀中～後半のもので側石には長さ80cm～1m大の石材を使用しており、2～3段積み上げている。底には拳大の川原石を敷き詰めており、幅は1.8～2.5m、深さ1mを測る。石組溝②は、石組溝①の溝幅を狭めながら東側石を新たに積んでおり、部分的に砂岩が転用されている。幅は1.3m、深さ60cmを測る。石組小溝は石組溝①の東側で検出した幅40～50cm、深さ20cmの南北溝である。側石には人頭大の川原石を並べているが大半は抜き取られている。掘立柱建物は丘陵先端につくられており一辺約40cmの柱穴が4基ある。柱間寸法は南北4.8×東西2.4mである。掘立柱塀は東から伸びる丘陵の裾部で検出したもので柱穴は5基あり、一辺40cmの掘形には直径20cmの柱痕跡がある。柱間寸法は1.8m(6尺)である。

出土遺物

土師器・須恵器・瓦・瓦器・陶磁器・砂岩切石・漆付着土器などが出土している。

まとめ

検出した南北の石組溝は調査区北側の第9・10・15次調査でも検出されており、その延長線上にあたる。また丘陵端では掘立柱建物が存在し、裾部では掘立柱塀が検出されるなど丘陵部と東限塀の間の様相が明らかとなった。

酒船石遺跡(第19次)調査概要

明日香村教育委員会

調査地 奈良県高市郡明日香村大字岡小字八条395番地
調査原因 信者会館改築に伴う事前調査
調査面積 約800㎡
調査期間 2002年4月2日～7月3日

検出遺構

検出した主な遺構には、石組溝、石組小溝、素掘溝、砂岩区画などがある。南北石組溝は改修されながらも数時期の変遷がみられる。以下、遺構の概要についてみていく。

石組溝①は7世紀中～後半のもので側石には長さ1m大の石材を使用しており、2～3段積み上げている。底には拳大の川原石を敷き詰めており、幅は1.8～2.5m、深さ1mを測る。石組溝②は7世紀末～8世紀初のもので、石組溝①の溝幅を狭めながら西側石は石組溝①の基底石を利用してその上に人頭大の川原石を2～3段分積み上げている。東側石は新たに積まれたもので部分的に砂岩が転用されている。規模は幅1.3m、深さ60cmである。石組溝③は8世紀前半のもので石組溝②の西側に新たに設置された石組溝である。側石には人頭大の川原石を4～5段積み上げているが、石組溝①・②のものとは積み方が乱雑である。この溝は途中、石組溝②を踏襲して北流している。規模は幅1.3m、深さ60cmである。石組小溝は石組溝①の東側で検出した幅40cm、深さ20cmの南北溝である。側石には人頭大の川原石を並べているが大半は抜き取られている。砂岩区画は石組溝②の東岸に作られた砂岩の区画である。長さ2.5m、幅約30cmでコ字形に砂岩切石を並べており、水辺に伴う施設と考えられる。

出土遺物

土師器・須恵器・瓦・瓦器・陶磁器・木製品・木簡・砂岩切石・榛原石・漆付着土器・墨書土器・獣脚硯・金環・獣骨などが出土している。

まとめ

飛鳥京跡東外郭塀の外側で、約33mにわたって大規模な石組溝を検出することができた。この溝の延長部と考えられる溝は酒船石遺跡第9・10・15次調査や、さらに北方の飛鳥寺南方遺跡でも見つかっており、300m以上にも及ぶことが明らかとなった。また、第18次調査で石組溝①の幅が2.5mあることが判明しており、溝幅に多少の変化はあるものの飛鳥地域では最大級の石組溝である。この石組溝は飛鳥京跡の東側で山側からくる水を受け、北へと流す基幹排水路であったと考えられる。石組溝は数回にわたり改修されて奈良時代まで存続しており、都が遷っても一気に廃絶しておらず、都市機能が維持されていたことが明らかとなった。

出土遺物では木簡が石組溝①・②から現在整理中ではあるが300点以上出土しており、



特に「刀支県主」や「牟義君」といった美濃国に関する木簡が多いこと、また文書木簡が大半を占めることから飛鳥京跡東外郭堀の外側にも役所などの施設が存在した可能性が高くなってきた。

酒船石遺跡（第21次）調査概要

明日香村教育委員会

調査地 奈良県高市郡明日香村大字岡小字門橋 520-2 番地ほか
 調査原因 範囲確認調査
 調査面積 約100m²
 調査期間 2002年7月22日～継続中

検出遺構

地表下20~40cmで花崗岩風化土の地山を検出しており、顕著な遺構は検出していない。

出土遺物

土師器・須恵器・砂岩などが出土している。

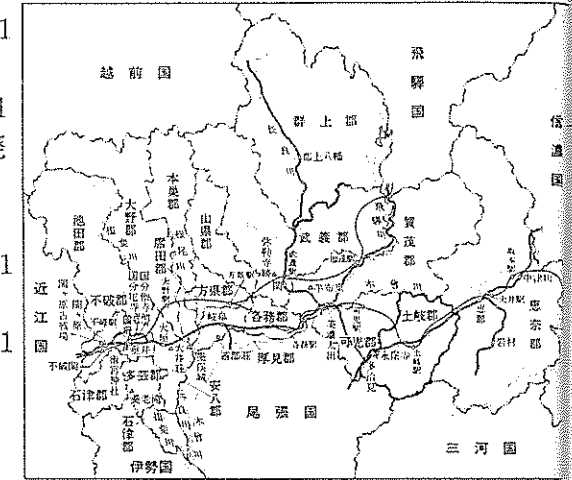
まとめ

酒船石南側丘陵の調査であったが丘陵端部が早くに削平されており、また開墾などで遺構は検出できなかった。

酒船石遺跡（第19次）調査 出土木簡

石組溝①

- (1) □坐大夫□ 091 (削屑)
 「~にいらっしゃる大夫が~なさる」という内容の削屑木簡。
 [大カ]
- (2) □夫□ 091
 [当 廿カ]
- (3) □ □月□三日□ (152)・(12)・3 081
 文書の効力を無効にするため、文字の中央で縦に割くとい廃棄処分を施している点が注目されます。
 [馬 君カ]
- (4) □廿五十□ 091
 [弥カ]
- (5) □□麻呂 091
 (4)(5)ともに、人名を記した木簡を削ってできたもの。



石組溝②

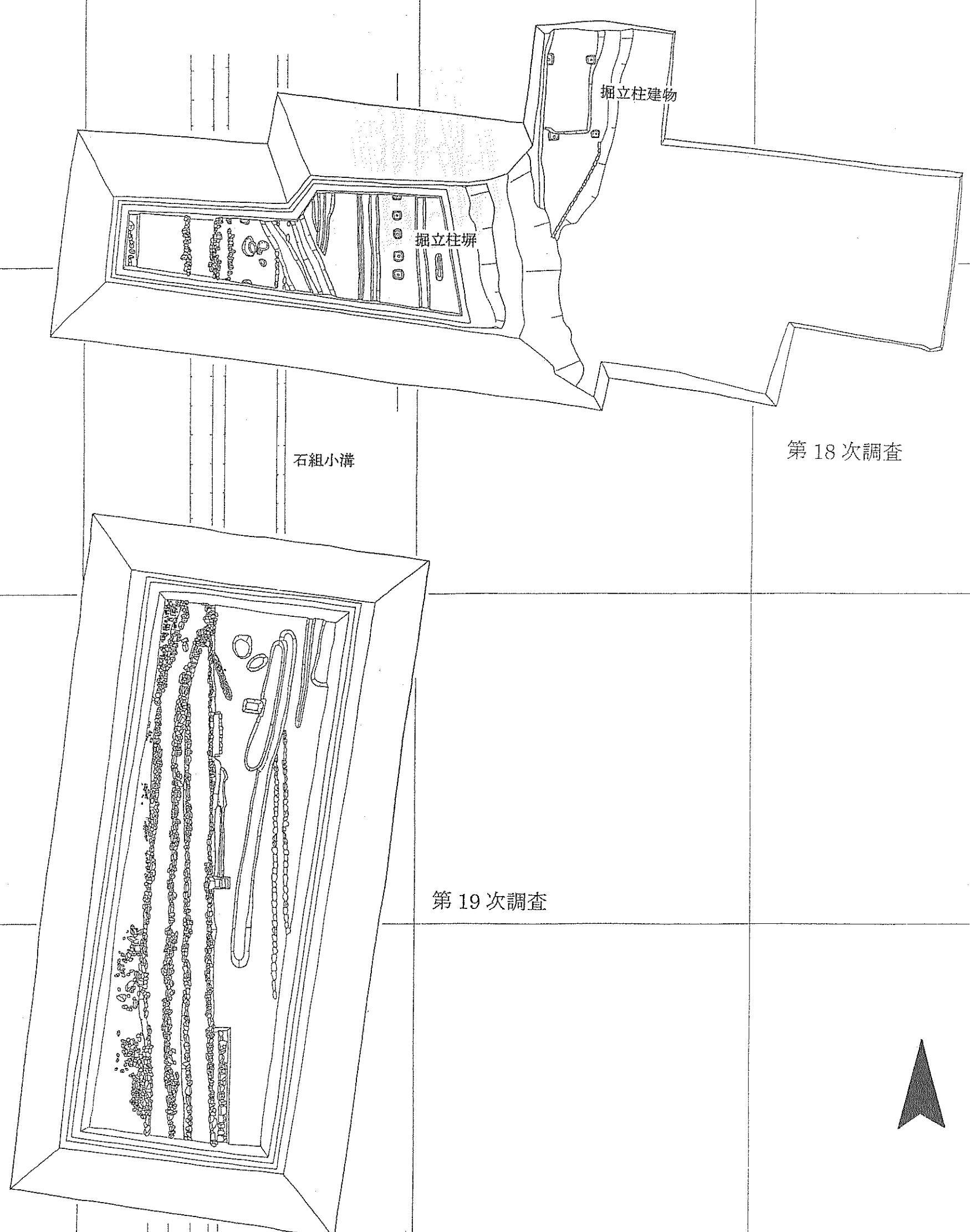
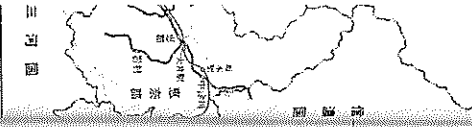
- (6) □□□□二日 三日 四 081
 十三 廿三 廿 (82)・(18)・2
 上の四文字は人名と考えられます。某人の勤務日を書き連ねた木簡だと推測されます。
 [刀カ]
- (7) □支縣主乙麻 091
 □
- (8) □刀支縣 091
- (9) 牟義君 091
 (7)(8)の「刀支」は土岐、(9)「牟義」は武義で、いずれも美濃国の郡(評)レベルの地名。美濃国関係者の名前を書いた削屑木簡です。(8)(9)のカバネ「縣主」(アガタヌシ)は、かつて土岐地方に県主制が施行されていたことを窺わせる貴重な資料といえます。

石組小溝

- (10) □大夫前□ (56)・(36)・3 081
- (11) □々白□ (62)・(36)・3 081
 (10)(11)は同一木簡の可能性があります。「~大夫の前で、恐れながら~を白[もう]しあげる」といった意味で飛鳥・藤原宮の時代によく使われた上申文書の形式をとっています。

出土木簡の特質

出土した木簡は約300点以上あり、まとめて出土していることから流されてきたものではなく比較的近い場所から破棄されて溜まったものと考えられます。また木簡の大部分は文書木簡であり、東外郭堀の東側に政務を司る役所などの施設が存在が想定できるようになりました。



石組小溝

掘立柱建物

掘立柱塀

第18次調査

第19次調査

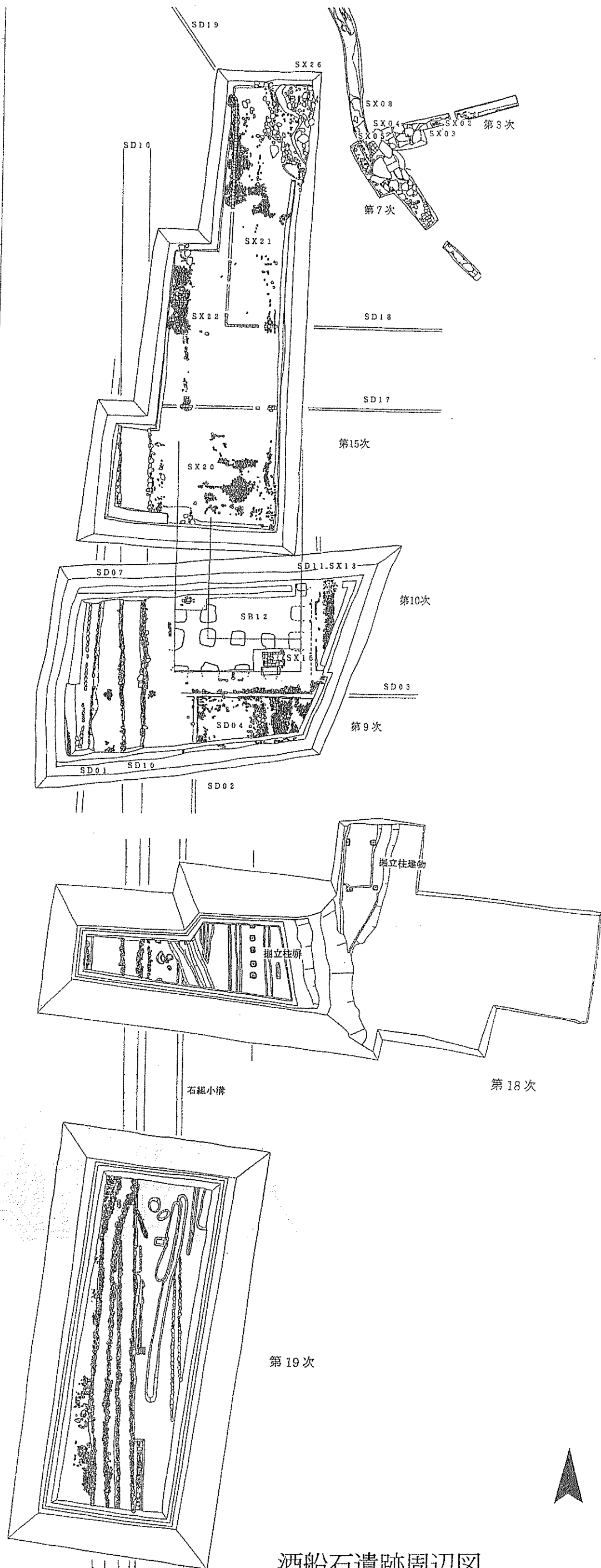
③ ② ①

石組溝

0 20m

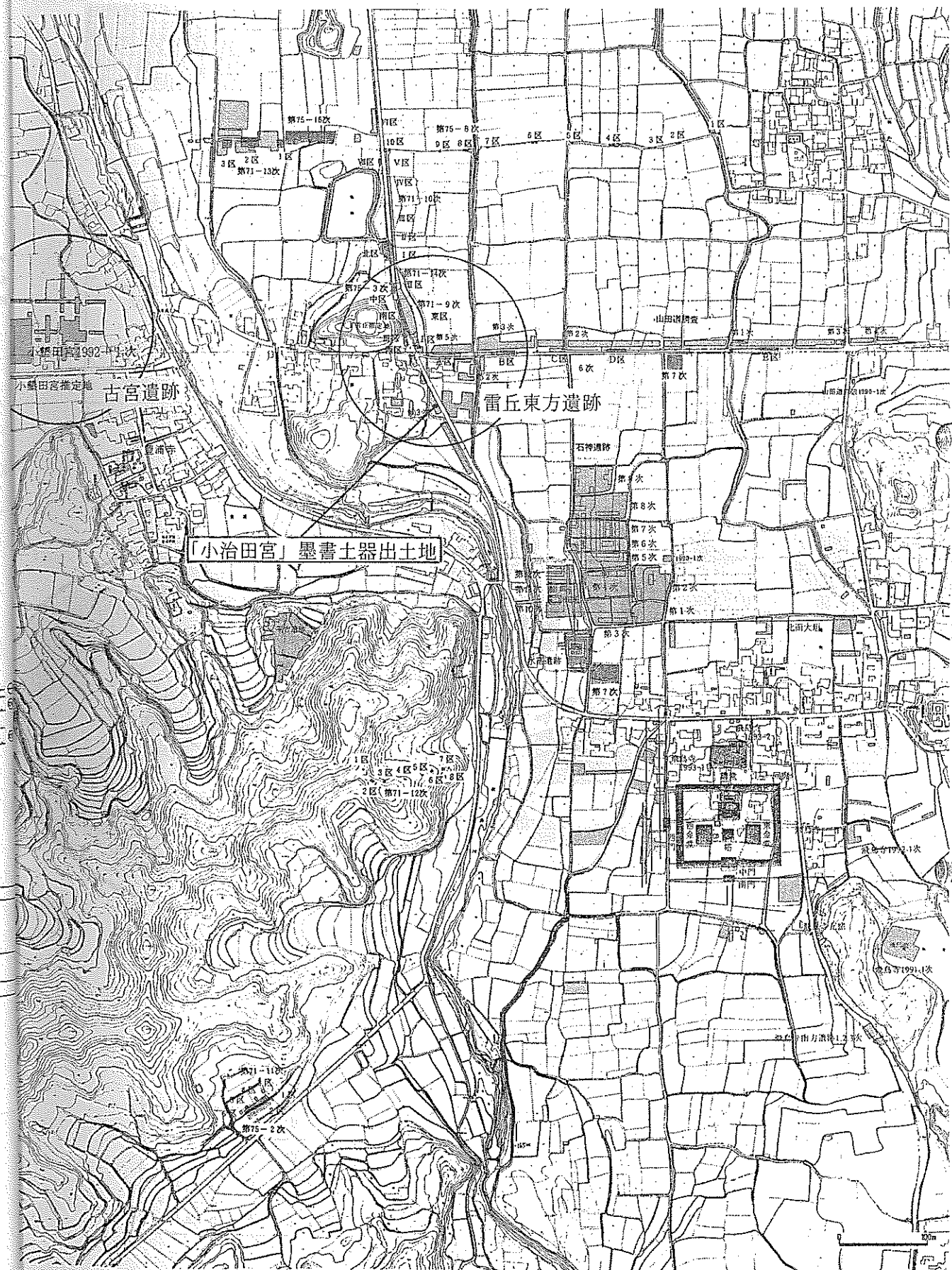
酒船石遺跡第18・19次調査遺構図

東限塀

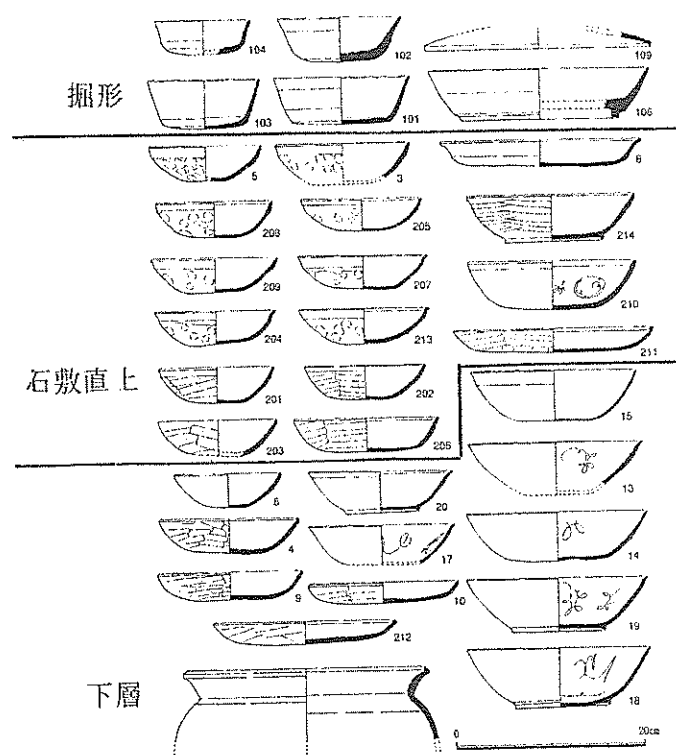


酒船石遺跡周辺図

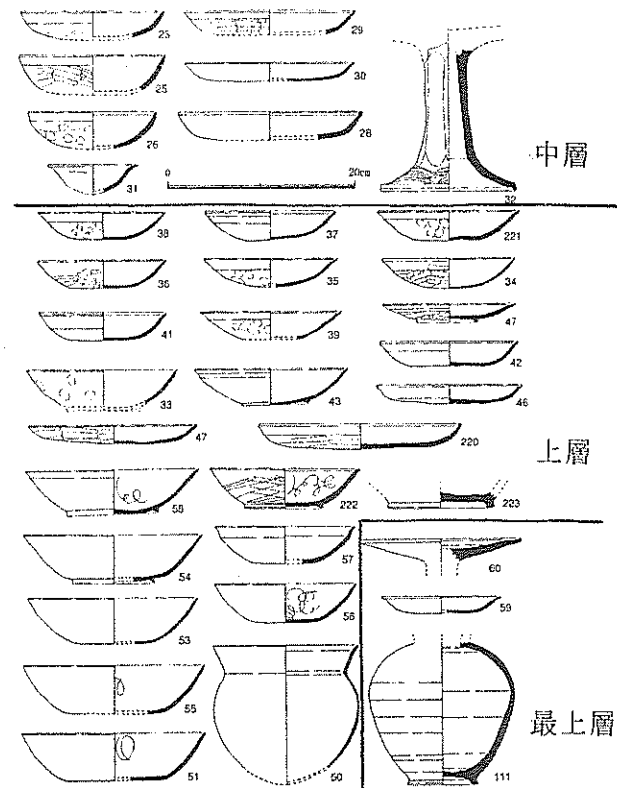
小治田宮の井戸枠の年輪年代



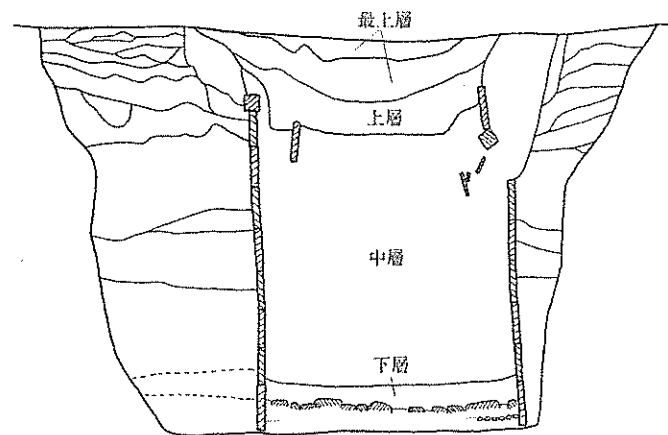
飛鳥地域の調査位置図



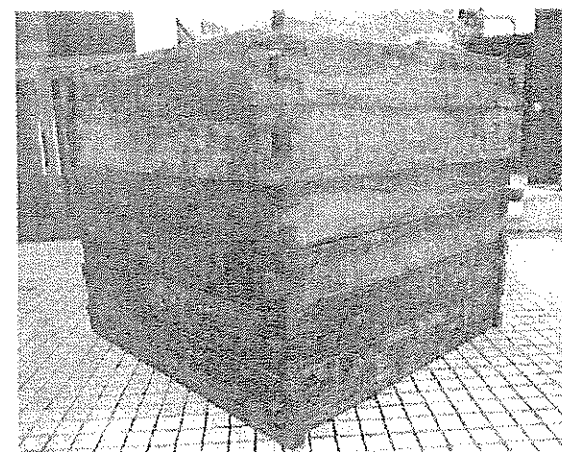
井戸出土土器①



井戸出土土器②




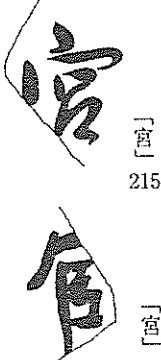
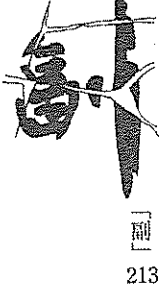




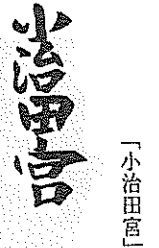

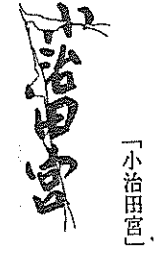




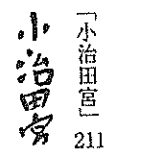

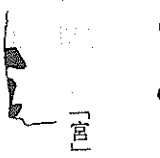

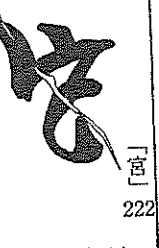


井戸 (SE01) 堆積状況



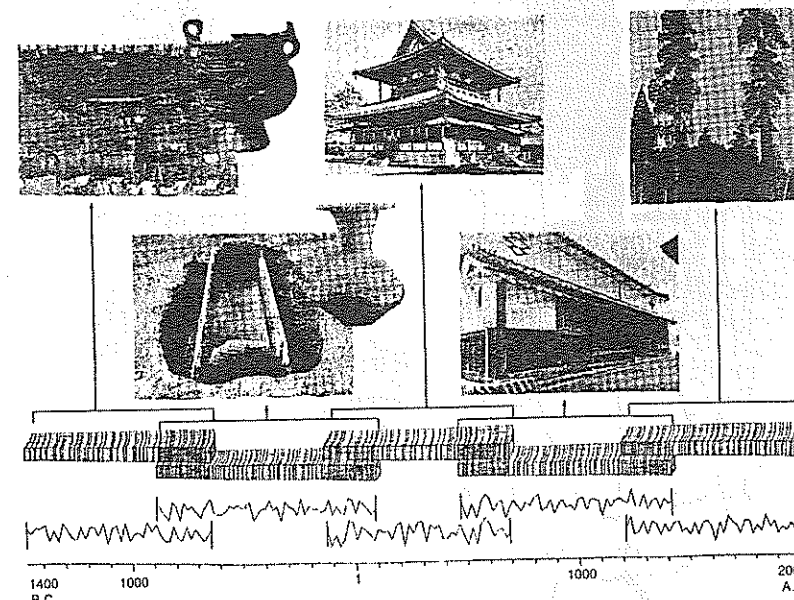
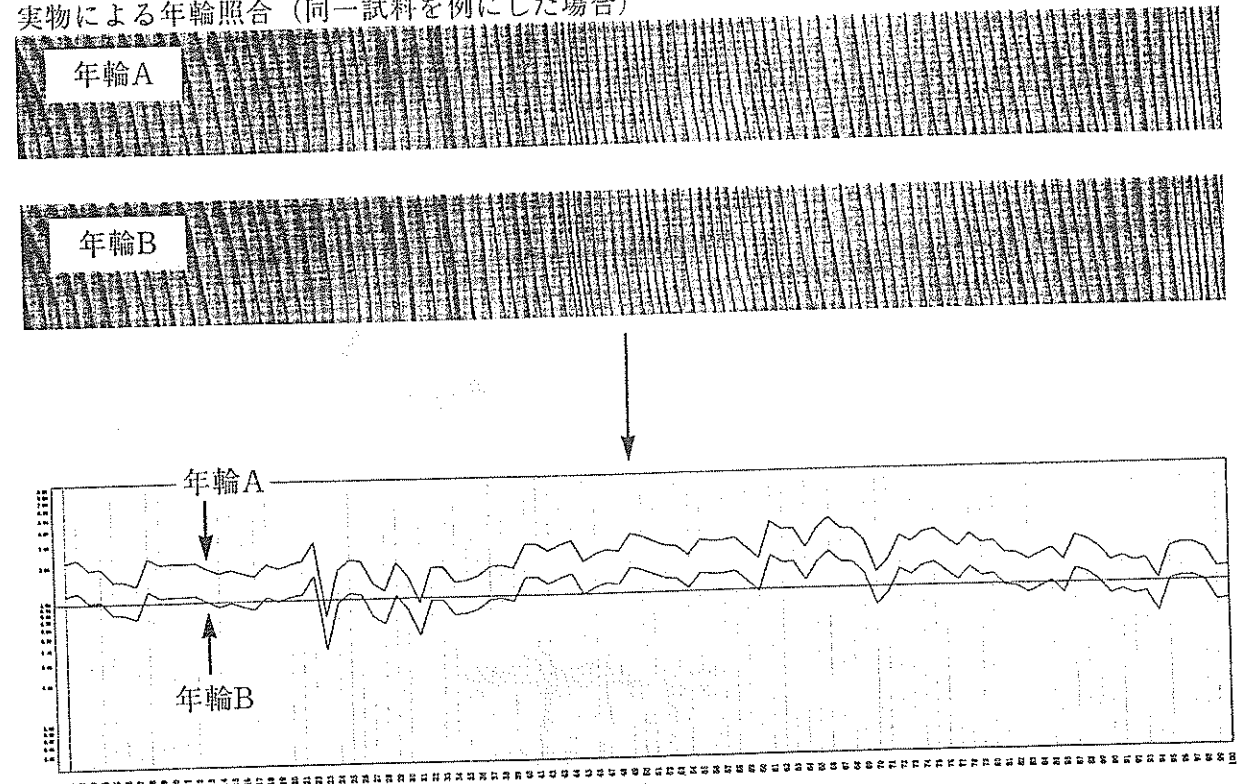
土器様相からみた井戸の年代

- 掘形・・築造時の土
奈良時代、時代判定が難しい
- 石敷直上・・使用時に溜まった土
平城VI・南都I中 (8世紀末)
- 下層・・使用時に溜まった土
平城VI・南都I中 (8世紀末) ~ 平城VII・南都I新 (9世紀前半)
- 中層・・埋め立て土
南都I中 (8世紀末) ~ 南都II古 (9世紀中頃)
- 上層・・南都II中 (9世紀後半)
- 最上層・・埋め立て後の不等沈下した穴に入れた土
南都II古 (9世紀中頃) ~ 南都II新 (10世紀初頭)

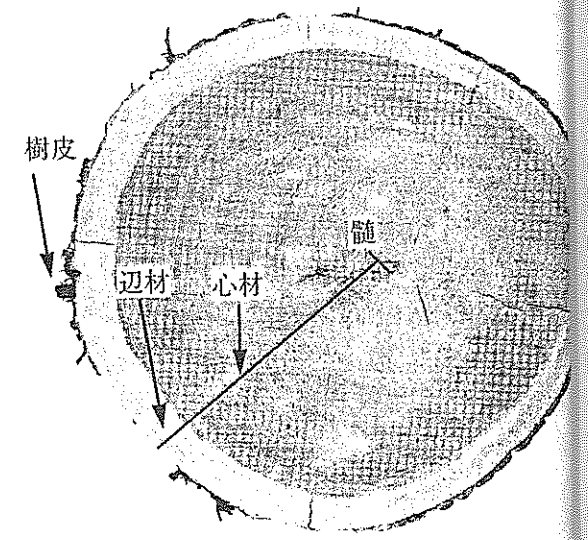
A類	 小治田宮 207 [小治田宮]	 小治田宮 208 [小治田宮]	 小治田宮 209 [小治田宮]	 宮 215 [宮]	 副 216 [副]	
B類	 小治田宮 202 [小治田宮]	 小治田宮 201 [小治田宮]	 小治田宮 212 [小治田宮]			
C類	 小治田宮 203 [小治田宮]	 小治田宮 204 [小治田宮]	 小治田宮 206 [小治田宮]	 小治田宮 205 [小治田宮]	 小治田宮 210 [小治田宮]	
	 城下 220 [城下]	 副 214 [副]	 10cm			
D類	 小治田宮 211 [小治田宮]	 副 212 [副]	 宮 218 [宮]	 大宮 221 [大宮]	 宮 222 [宮]	

「小治田宮」墨書分類図

実物による年輪照合 (同一試料を例にした場合)



△ 長期の暦年標準パターン of 作成法



△ スギの円盤標本

試料	計測年輪数	年輪年代	形状
井戸杵 1-2	113	758	辺材型 (3.0 cm)
1-3	161	676	心材型
1-4	328	-	辺材型 (1.2 cm)
1-6	146	-	辺材型 (2.8 cm)

井戸杵の年輪年代

記念講演

「東アジアにおける十二支像の起源と変遷」

明日香村文化財顧問

関西大学名誉教授

網 干 善 教 氏

東アジアにおける十二支像の起源と変遷

網干 善教

昭和47(1972)年3月、奈良県明日香村に所在する高松塚古墳を発掘し、星宿、日月、四神、男女人物群像の極彩色壁画を検出した。その時の課題の一つは、このような壁画の描かれた古墳が他にもあるのかということであった。それを考証するために、昭和53、54年に同じ地域にあるマルコ山古墳を発掘したが、壁画は描かれていなかった。そこで注目したのがキトラ古墳であった。昭和58年、ファイバースコープを用いての第1回目の探査を行い、石槨奥壁に玄武図が描かれていることが判明、高松塚古墳以外にも壁画古墳のあることを知った。

平成10年には再度探査を行い、天井に星宿図、東壁に青龍、西壁に白虎図があることがわかり、平成13年3月、デジタルカメラ挿入する第3回目の探査を行い、南壁に朱雀図があることが確認された。そして平成13年12月の第4回目を実施され、新しく東壁の金箔の日像に三脚(足)鳥があり、東壁北側に十二支を思わせる獣頭(面)人身像が見つかり話題となった。太陽に三脚鳥の絵は日本や中国に事例はあるが、問題は高松塚古墳では東西両壁に男女計16人の人物が描かれていたのに、キトラ古墳で獣頭人身であったことの意義についてである。これは非常に難しい問題で、現時点では十分な検討を経ていないが、少しばかり気づいた点を挙げておきたい。

獣頭人身の十二支像

我々の生活の中での身近なものとして12を単位とするものがある。(12進法)。例えば1年は12か月、1日は午前12時間、午後12時間。最近あまり用いられないが、「ダース」や「グロス」という数の単位などがある。また「日本書紀」などでは干支で年や日を表している。方向を表すこともある。このように時間、数量、方位の単位として用いられている。

このような方法が歴史的にどのように展開してきたかということは正確にわからないが、中国では「黄帝、子丑十二辰を立つ。以て月を名づけ、十二辰に配り、之に属せしむ」とあり、「天干」10種と「地支」12種を組み合わせて「六十甲子」とする方法がとられてきた。考古学資料では河南省安陽市の殷墟遺跡から甲骨に六十干支が刻まれているといわれ、地支に動物を該当させた最古の例は湖北省雲夢縣^{ふゆう}匪虎地11号秦墓から出土した竹簡であるとされる。

中国では十二支のことを「十二生肖」と呼び、十二時、十二辰、十二属性ともいわれる。ところで十二支の所例をみると配当された動物をそのまま表現する場合とキトラ古墳のように獣頭人身の擬人像で表した場合がある。また、動物を俑で製作したものや墓誌などに彫刻した例、さらに壁画に描いたものなどがあり、それらが製作された年代、種類、地域とどうかかわるのか詳細に検討することが重要である。ここでは紙幅の関係もあって個々について述べる余裕はないので、その動向を考えておきたい。

まず動物の種類であるが、現在は子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥であるが、秦墓竹簡では巳を虫(蝮)、申は環(猿)、酉を雉、午を鹿としている。これが現在のようになるのは恐らく後漢時代からといわれる。そしてこの天干地支が陰陽五行説と結びつく。

十二支の造作のうち最も古いものは山東省臨淄県の北朝崔氏墓地第10号墓(6点出土)と17号墓の生肖俑(5点出土)が発掘されている。この俑は動物を写実したものである。

次に壁画として描かれた例としては山西省太原にある北齊時代の婁睿墓の獣形図があり、紀年は武平元年(570)とされる。ここではキトラ古墳と同様、墓室の天井部に星宿の天文図が描かれていた。

十二支を表現する思想は隋、唐代になってから顕著になった。その事例として銅鏡、俑、墓誌などに見られる。銅鏡についてみると、これには2種類がある。1つは隋の大業4年(608)の紀年銘を有する李静訓墓や唐貞観4年(630)銘の李寿墓出土のものがある。他の種類は四神十二支鏡で内区に青龍、朱雀、白虎、玄武の四神があり、外区は十二支が彫られる。また、西安東郊からは唐代の十二支八卦背方鏡が出土した例もある。

次に獣頭人身の十二支の俑が出土した例が多くある。そのなかで、紀年の確かなものとしては湖南省湘陰縣城関鎮の古墓から隋の大業6年(610)の出土例がある。大業6年といえば『隋書・倭国伝』にみる大業3年の小野妹子らの遣隋使の3年後である。

陳安利氏は獣頭人身の十二支俑には南方系統と北方系統の2系統のあることを指摘している。氏によると南方系統は湖南省長沙や湖北省武漢などに多いとされる。大業6年の湘陰縣の例は南方系統の中でも古いものである。湖北省武漢の東湖岳家咀の隋墓、四川省万県^{せん}の唐永徽5年(654)、湖南省長沙の黄土嶺墓、牛角塘墓、咸嘉湖唐墓などで出土している。

それに対して北方系統の古いものは北魏にあるが、数量的に少なく、唐代のものとして河南省偃師県杏園村の李景由墓から出土している唐開元26年(738)の鉄の生肖俑の例が古いとされる。その他、楊思勳墓^{きん}の開元28年(740)、安思礼の天宝3年(744)などが見られる。

獣頭人身像と被葬者の身分

西安周辺で出土した墓誌に獣形図の十二支を彫刻したものが慰遠恭墓の顯慶4年(659)から張去著墓の天宝6年(747)まで若干例があり、天宝7年(748)の張去逸墓以後になって獣頭人身の彫刻が主流を占める傾向がある。陳安利氏の挙げた唐代墓誌のうち「安史の乱」(755~763)以前と以後との比較表をみると、動物図が以前は14例、以後は3例、獣頭人身は以前2例、以後63例と圧倒的に以後が多い。しかも三品以上は以前が15例、以後が14例であるのに対し、五品以上は以前では1例、以後は22例となり、六品以下の下級品秩では以前が3例、以後は15例となっている。結論として身分の低い人物に多いということになる。そして俑は多いが、陝西省乾県にある唐第18代の僖宗の靖陵のような壁画は少なく、時代も新しい。

朝鮮半島の高句麗をみると、徳興里古墳に獣頭鳥体の例があるが、キトラ古墳のようなものは見当たらない。

新羅慶州には守護獣として古墳の腰石(外護列石)に十二支の石彫を配する例がみられる。その内容は武服十二支像が7例、文服十二支像が3例の計10例が知られているが、姜友邦氏の所見によればそのいずれもが8世紀の中葉から9世紀の後半の時期であるとされる。したがって720年頃まで降るかもしれないとされる高松塚古墳やキトラ古墳の年代より新しいもので、新羅のこれらの例からキトラ古墳の十二支像が影響を受けたとは考えられない。このように観察してみると獣頭人身の擬人像を表す十二支像は中国では隋代に俑として初現し、唐代になってわが国に波及したが、それがどのような経過によって古墳の墓室の壁画となったか簡単には分からない。

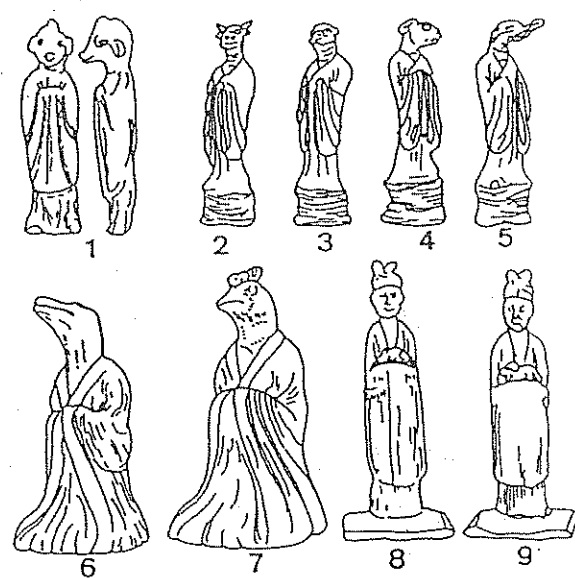
高松塚古墳の人物像に対してキトラ古墳ではなぜ獣頭人身の擬人像である十二支が描かれたのか。その理由の意味するところは大きな謎であり、将来検討すべき課題である。今後計画されている内部の調査の成果に期待したい。

北方地区 唐・五代墓出土の生肖俑



1. 湘陰隋大業6年墓出土(蛇)
2. 武漢周家大湾241号隋墓出土(蛇)
3. 四川万県唐永徽5年墓出土(羊)
- 4, 5. 湘陰唐墓出土(鼠・馬)
6. 長沙咸嘉湖唐墓出土(猿)

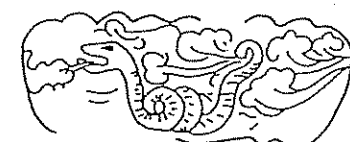
南方地区 隋唐墓出土の生肖俑



1. 唐開元26年李景由墓出土鉄生肖俑(豚)
- 2-5. 天寶3年史思礼墓出土陶生肖俑(牛・虎・兎・龍)
- 6, 7. 揚州司徒廟唐墓出土三彩生肖俑(蛇・鶏)
- 8, 9. 江蘇邗江蔡莊五代墓出土木生肖俑(鼠・犬)



張去逸墓誌(張) 官都公主墓誌(官) 秦朝儉墓誌(秦) 第五孫女墓誌(孫)



陸軍元年李興墓誌(蛇)



天寶3年王守言墓誌(馬)



十二支像(申) 統一統緒 陸軍元年

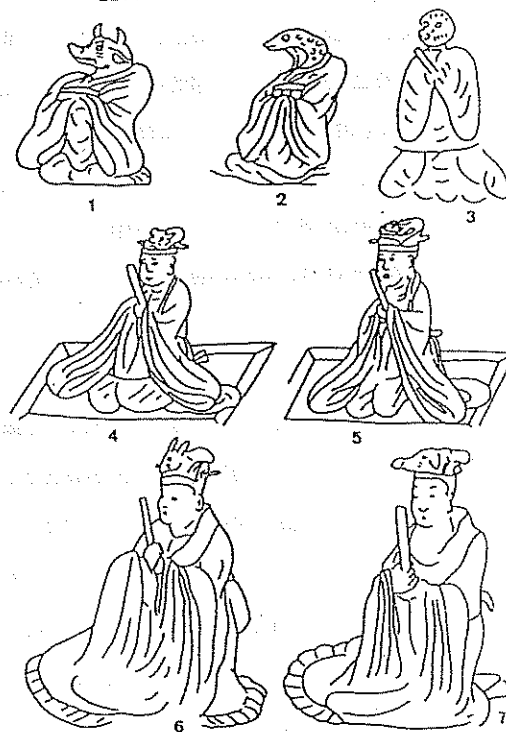


長沙咸嘉湖唐墓出土青斑生生肖俑
左:鼠 右:猿



四川万県唐墓出土青斑生生肖俑
左:虎 中:馬 右:羊

墓誌に刻まれた生肖図案



- 1, 2. 天寶7年張去逸墓誌(牛・蛇)
3. 乾符6年白敬宗墓誌(猿)
- 4, 5. 大中4年崔氏夫人墓誌(虎・龍)
- 6, 7. 五代開平4年石彦辭墓誌(兎・豚)

時期	動物形象	獸首人身	人形生肖	合計
安史の乱前	11	2		13
安史の乱後	3	63	3	69
合計	14	65	3	82

陝西省博物館所蔵唐代生生肖墓誌統計表

時期	品秩	三品以上	五品以上	六品以下	合計
安史の乱前		15	1	3	19
安史の乱後		14	22	15	51

生生肖墓誌の墓主の品秩統計表

安禄山 703?~757 唐代。*安史の乱の首謀者。常州生まれ。父は*胡人、母は*突厥人という。榮進して平盧・范陽・河東3*節度使を兼ね、華北・満州にまたがる軍閥巨頭となる。反対派の宰相*楊国忠に誘発されて、755年范陽(今の*北京)に反し、*洛陽に乗り込んで、翌年大燕皇帝と称した。その軍は*長安をもおとしたが、次男慶緒に殺された。乱は慶緒、ついで禄山の部将*史思明・史朝義父子に受け継がれた。合わせて安史の乱という。



安史の乱 755~763 唐の中期。*玄宗・*肃宗・代宗の3代にわたり、*安禄山・安慶緒父子、続いて*史思明・史朝義父子によって指導された反乱。*洛陽・*長安を初め、華北の要地の多くは反乱軍に奪われた。*ウイグルなどの援助で回復したが唐室の権威はこのために急激に衰えた。

墓主姓名	刻石年代
△ 尉遲恭	顯慶四年(659)
△ 蘇 燾	顯慶四年(659)
△ 鄭仁泰	麟德元年(669)
△ 李 賢①	神龍二年(706)
△ 馮君衡	開元十七年(730)
△ 張去奢	天寶六年(747)
○ 張去逸	天寶七年(748)
○ (宜都公主)	貞元十九年(804)
○ 秦朝儉	元和十二年(817)
○ (殘石)	
○ 高克從	大中元年(847)
○ 段文衡	大中三年(849)
○ 劉士準	大中四年(850)
○ (殘石)	
○ 石彦辭	開平四年(910)

新羅の十二支像

キトラ古墳の壁面に寄せて

網干善教

平成14年11月1日

No.59

奈良文化

奈良県明日香村にあるキトラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定



獸頭人身十二支像のある慶州掛陵

奈良県明日香村にあるキトラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定

奈良県明日香村にあるキ
トラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定

奈良県明日香村にあるキ
トラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定



国立博物館にある慶州出土の十二支像
（『新羅の十二支像』による）

奈良県明日香村にあるキ
トラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定

奈良県明日香村にあるキ
トラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定

奈良県明日香村にあるキ
トラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定

伝新羅王陵の十二支像

奈良県明日香村にあるキ
トラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定

新羅の俑の獸頭人身像

奈良県明日香村にあるキ
トラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定

新羅の十二支像と相違する

奈良県明日香村にあるキ
トラ古墳の石堀内をデジタ
ルカメラで探査したところ
偶然十二支像の一部が撮影
され、しかもその像が獣頭
（面）人身像であることが
勿論、それ以前の探査で
も天井部に星辰図、日・月
像、そして四方の壁に四神
図が描かれていることが判
明、近くにある高松塚古墳
についての壁面古墳の確認
という注目で注目されてき
た。特に第三次探査で、石
堀南壁に躍動的に表現した
朱雀を描いた壁画がこのつ
いでこの獣形が「寅」と推定